

■番外編＝オリオンジャズが産声を上げたその日「合言葉は、オリオンジャズ！」

ではオリオンジャズの発起時のエピソードを。昭和50年代後半、バブル景気に突き進んでいた時代、商店街やマーケットは非常ににぎわっていたが一部マスコミや業界誌で中核都市においては今後ドーナツ化現象が懸念される、との記事が目につくようになった。

ここで我々商店街の青年部はこのままでいいのかと自問自答が酒の肴になっていた。当時青年部では商店街のイベントを一手に引き受けていて、各イベントは人気を博していた。当時青年部は15名もいた。固定感のあるイベントだけでなく、新しいイベントを開催し来街者の増員を図ることが我々青年部に課せられた事業ではないかと、日々閉店後メンバーが集まり、今までにやったことの無いイベント。それも、ほかの都市でも開催例のないものは無いかと酒を酌み交わしながらの討論を重ねてきた。

そんなことを1年以上楽しくやりあった。当時は音楽を聴くにはコンサート会場やライブハウスしかなかった時代だ。ふと誰ともなく、街中で商店街の中でコンサートできないのかな。それ、いいかも？となったが、果たしてどうやるのだろうか。暗中模索の日々が続いた。ジャンルも問題に上がった。僕ら若いだからロックじゃないの？でも街中大音量で無理か。フォークはどうだ？ちょっと違うか。そういえば渡辺貞夫さんは中央小学校出身、我々の大先輩だ。という訳ですんなりジャズをやろう！と全員一致。ここからが大変だった。

なにせ全国見渡しても過去商店街の中でコンサートの実績がない、見つからない。いつ・だれが・どこで・どのように・何を……。俗に言う5W1Hで悩んだ。夏休みにやろう・我々の手作りで・商店街の路上で・ステージを作って・ジャズコンサートを。

でも、誰に演奏してもらうのか？ イベント自体、海のものとも山のものともわからないでプロにまかせようか？ そんなこんなで悩んでいたが、商店街のポスター掲示板にダンスパーティー開催のポスターが。演奏者は誰だ？「スウィングハード」どこかでバンド名聞いたことがあった。早速、そのダンスパーティー会場に行き、バンマスの吉原郷之典さんに相談。すると、「おもしろい！こういうイベントが街中に欲しかった。よし、やっぺ！」と、あの流暢な栃木弁で答えてくれた。ありがたかった！

この後はとんとん拍子で話は進み実行委員会を設立、組合の予算内で開催することができることになった。吉原さんが次々と出演者を選定、第一番に、宇都宮市立第一姿川小学校スイングジュニアオーケストラの児童たちを推薦決定。出演者はOTOTO・倉沢秀明カルテット・スウィングハードオーケストラ・そしてゲストに水町理沙さんをお迎えすることとなった。

ステージも菱沼元理事の友人栃木県建築士協会青年部の松本さんらの協力で立派なステージを作っていた。照明も高さ5メートルの工事現場用タワーを2か所に設置、スポットライトを乗せた。開催日 83/8/12 が近づき、抜かりはないかと、連日点検。そしていよいよ第一回オリオンジャズの開演。子供たちがステージに上がり星先生がタクトの準備。そして、当時新星堂の楽器売場の店長であった毛塚君を司会に起用。そして、名言は生まれた。「合言葉は、オリオンジャズ！」

タクトが振られ「A列車で行こう」が商店街に鳴り響き埋め尽くした観客も一緒に手拍子を打ってくれた。

やっと始まったオリオンジャズに、スタッフ全員感涙でステージは潤んで見えた。そして抱き合った。5m上で照明を操っていた樋山君・島田君も涙が止まらない。タワーをおさえていた私の肩に、。

あっという間の4時間であったが観客も大満足の拍手を贈ってくれた。無事コンサートも終わり片付けも清掃も我々実行委員がやった。そして、歓喜の打ち上げになり誰一人帰ろうとせず明け方近くまで美酒を堪能。それは、38年前のことであった。

これまで224バンド・ゲストに出演いただいた。多くの方々の協力・ご理解があってオリオンジャズが開催されていることにオリオン通り商店街を代表し感謝御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

小さい手作りのジャズフェスだが、オリオンジャズ開催がベースとなり「ジャズのまち宇都宮」を形成し、いつのまにか日本国内で一番長く続いているジャズフェスになっている。仙台定禅寺ジャズフェスの実行委員が訪問されオリオンジャズがお手本に開催、全国各地の街中でイベントが開催されるようになった。まだまだ続けます。

これからのオリオンジャズお楽しみに。「合言葉は、オリオンジャズ！」

うつのみやジャズのまち委員会 企画委員
オリオンジャズ実行委員長
館野 直義